YAMAGA

近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ
001

熊本県初の総理大臣（一八五〇～一九四二）

清浦奎吾（きようらけいご）

熊本県下で初めての内閣総理大臣。四十七歳で松方内閣の司法大臣、その後も山県・桂各内閣の司法大臣を歴任。当時制定された刑法・民法等はほとんど清浦奎吾がつくったもので「我が国警察界の恩人」と言われる。農商務大臣時代は、耕地整理と土地改良事業を推進し、林業試験場を創設。枢密院議長を経て、大正一三年遂に内閣総理大臣に。「清浦（奎堂）文庫」の設立、「清浦賞」の設立など故郷の後進の育成にも貢献。高風清節の士。従一位大勲位受章。

熊本県初の総理大臣

清浦 奎吾

KIYOURA KEIGO 1850～1942

大器を思わせる幼少時代

国道三二五号沿いの鹿本町来民から、北へ十分も歩くと、左手百メートルほどに、こぢんまりとした山門と高い御堂の屋根瓦が見えます。本願寺派の明照寺です。嘉永三年（一八五〇）二月十四日、清浦はこのお寺で生を受けました。父は大久保了恩、母は幸といいました。

「私の生家は格別貧乏というほどではなかったが、また金持ちというのでは勿論なかった。兄弟六人中の五番目だったから、学資も不十分だったし、親の遺産などは何一つ相続したものはない。」と述懐しているように、特別な門閥もないごく普通のお寺の五男坊でした。

幼名は普寂といいました。

嘉永年間といえば、江戸ではペリーが黒船を率いて浦賀に来航した頃で、何かと世情騒然とし始めたころですが、肥後の片田舎までは及びようがなく、まだのんびりとしていました。幼友達とたこ揚げに興じたり、夏は寺のすぐそばを流れる井手で水遊びをしたり、秋は野山で果実取りや椎の実拾いをし、冬はねんぎ・はま投げの遊びや竹馬の競走に夢中になりました。

父の了恩は、国学・漢学の素養も深く、近所の子弟を集めて、読書や習字を教えていました。自然と、彼もこの父について『論語』や『中庸』を習い、『源平盛衰記』や『菊池軍記』などの戦記物を読みふけりました。十一歳の頃から近くの医師について漢学の勉強もしました。その才能は人に抜きんでて素晴らしいものでした。利発な明照寺の五男坊は次第に生来の天分を発揮するようになりました。

ある日、普寂が友達と寺の門前で遊んでいると、馬をひいた馬子が通りかかりました。見ると馬の口元の手綱をだらしなく緩めていました。その姿を普寂はすぐに見とがめて、

「手綱は口元三尺（約一メートル）というではありませんか。だらしなく緩めていると、通りがかりの人に噛みつくことがないとも限りません。また道端の作物を食い荒らすかもしれません。万が一ということもあります。口元三尺を守らないのは、馬子の不心得です。」と馬子に対して説法をしたといいます。

馬子は返す言葉もなく、少年普寂の言うとおりに手綱を引き締めました。

しかし、父の了恩は彼のこのような才気の先走りを心配して強く戒めたので、彼自身も自分の高慢を深く恥じました。

また、普寂は町内の日隈道場で剣道に励んでいました。ある時、道場主が普寂に、

「お寺の子どもがどうして剣道を習うのか。」

と尋ねますと、

「私は坊さんになるつもりはありません。将来国のためになる立派な人になるため、勉強とともに体を鍛えているのです。」

とはっきり答えました。

ところで、明照寺では長男が家に残り、次男以下は、同じ来民町の大光寺をはじめ、県下のお寺にそれぞれ養子として出ていきました。少年普寂もまた僧侶となるため、熊本城下の寺院として名門の

明照寺

父了恩と普寂（12歳）

浄行寺に養子として養われることになりました。十二歳の頃です。しかし、読経・勤行は彼の志とも趣味とも合わず、やがて養家を去って来民に帰ることとなりました。

向学心に燃え、将来への大志を抱く普寂は、十三歳の秋、大津の大矢野塾に入り、勉強に打ち込みました。ここでは大矢野格次について経書を学び、渋江公木からは詩文を教えられました。読みたい本がなかなか手に入りませんので、人から借りたり、写本をしたりして、『日本外史』や『太閤記』などに読みふけりました。

「大矢野塾では学んで得るところが少なくなかった」と普寂は当時のことを述懐していますが、記述されている漢詩の程度の高さ、情緒表現の細やかさなど驚かされる内容ばかりでした。

普寂が大矢野塾で勉学を続ける中、天下の形勢はいよいよ急を告げつつありました。桜田門外の変、薩英戦争、蛤御門の変、長州征伐、勤王佐幕の争い、鎖国・開国のもつれなど天下挙げての騒ぎへと広がりつつありました。

咸宜園時代

世の中の動きは、ますます騒がしくなっていきました。普寂は「このような世の中の流れの時、片田舎での勉強ではだめだ。もっと、大きな天下の動きがわかるところへ出て学ばなければならない」と考えました。

そこで普寂は、広瀬淡窓が開塾した日田の咸宜園に行きたいと願いました。そこは、九州はもとより、全国から秀才がぞくぞく集まってくるところでした。両親はなかなか許してはくれませんでしたが、母親が希望を認めてくれ、父親からもやっと許しが出ました。

来民から日田へ行くのには二つの道筋がありました。南関から久留米に出て日田に行くのが本道で、矢谷から宿ヶ峰を越え、鯛生から日田に出るのが間道です。最初彼は遠回りでも本道を行っていましたが、後には間道を行くようになりました。間道は、獣がいたりおいはぎがいたりで大変な道でした。

平成一三年度より、来民小学校、稲田小学校、中富小学校の三小学校の六年生が「立志の道を歩こう」を行っています。夏休みを利用して、この間道を歩いて咸宜園へ行き、清浦奎吾の足跡をたどっています。

「立志の道を歩こう」の様子

熊本県初の総理大臣

清浦 奎吾

KIYOURA KEIGO 1850～1942

さて、普寂の日田「咸宜園」での留学生活ですが、咸宜園の教科書は『四書五経』にはじまり、『十八史略』・『文章軌範』・『日本外史』のほか、詩文集などでしたが、その学風は、本を読むさい字句の解釈にこだわらず、大筋がわかれば良いとしました。教え方は厳しかったのですが導き方は親切で、師弟の間には何時も暖かいものが流れていました。最も留意されたのは、少年たちの品性と陶冶と個性の発揮でした。それと共に厳しいしつけがほどこされました。

日田の咸宜園

咸宜園では、初級から九級まで九段階の成績別に分けてあり、進級も難しい試験によるものでした。「九級になるのは天に昇るより難しい」と塾生を嘆かせました。普寂はこの厳しい塾生活に耐え、学問に打ち込みました。

普寂は九級に上がり、最も優秀な塾生を意味する「都講」にまで登りつめ、先生の代わりを務めるまでになりました。

この頃、普寂は、尊敬していた松本衝の号「清浦」を姓、別の号「奎堂」を取って奎吾とし、清浦奎吾という名前にあらためました。

咸宜園の生活も七年目を迎え、清浦奎吾は故郷の来民に帰ってきました。来民に帰った翌年には、熊本城下に移り、塾を開きました。

重要な役割を果たす奎吾

帰郷して一年、清浦奎吾は将来を目ざして上京しました。上京した奎吾は、学校改正所で手腕を認められたのをはじめとして、大審院検事局の検事・監獄局長などで活躍しました。

清浦は、四十三歳で司法次官となり、その後、司法大臣を三回、農商務大臣・内務大臣などを歴任し、大きな功績を残しました。

ちょっとコラム

●来民に帰る途中、鯛生まで来ると、日が暮れてしまった。道沿いの農家に一夜の宿を頼んだが断られてしまった。困り果てた普寂は一計を案じた。

馬小屋の馬の鼻面に唐辛子を塗りつけた。馬は苦しみだし、家の人は大あわてとなった。そこへ普寂が現れ、「さて、私にいささかの心得がある。治してあげよう。」と言って、お湯に茶かすと黄色い粉薬（壁土）を溶かし、馬の鼻面を洗ってやった。馬はたちどころに静かになり、ケロリと治った。家の人はたいそう喜び、一夜の宿を与えてくれるとともに、ご馳走してくれた。

後に、清浦奎吾は「これは誰かの作り話だろう。そんな度胸と頓知があったら、今ごろはもっと偉い人物になっていただろう」と否定しているが、こんな話が出るところをみると、相当の茶目っ気のあるいたずら小僧でもあったようだ。

●咸宜園に入塾した普寂は、一生懸命勉学に励んだ。その努力は大変な物だった。しかし、反対する父親からやっと許しを得た普寂は、学費の仕送りは十分ではなかった。塾費を得るために、寒い雪の中を托鉢をして、お布施を貰いにまわることもあった。しかし、そのような厳しい生活の中でも勉学に励んでいた。

総理大臣就任と地元の喜び

大正十三年（一九二四）二月、第二十三代清浦総理大臣誕生祝賀の旗行列の波が、早春の光の中を「勇敢なる水兵」のマーチに合わせた歌とともに、町の中を流れていきます。

門閥や閨閥もなく、学閥そして藩閥もなく、腕一本脛一本で彼が総理大臣まで上りつめた事は、まさに郷土の誇りであり、町民の喜びはひとしおでした。

山高きがゆえに尊からず

（一）第一回の大命降下

第一次伊藤博文内閣以来元老による組閣が相次ぎ、第十四代西園寺内閣（第二次）、第十五代桂内閣（第三次）に及んで、元老政治に対する反発は護憲運動へと発展しました。

そのうち、桂内閣はわずか二ヶ月で倒れ、またしても大命は元老伯爵海軍大将山本権兵衛に降下し、大正二年（一九一三）二月二十日山本内閣が成立しました。海軍大臣を三回務め、海軍の巨頭と目される山本は、海軍軍備の増強を目指し大艦の建造を進めていたところ、ドイツのシーメンス・アンド・シュッケル東京支社が海軍の要路に贈賄したと外電が報じました。

衆議院では早速このことが取り上げられて政府弾劾案が上程され、院外では政府弾劾運動が高まって警察隊との衝突がくり返され、国内は騒然となりました。

議会の審議は停止し、遂に山本首相は大正三年（一九一四）三月二十四日に辞任しました。

折しも、欧州ではこの頃第一次世界大戦が勃発しました。

三月三十一日、元老会議の奏薦を経て組閣の大命が枢密顧問官清浦奎吾に降下しました。時に清浦は六十五歳、政治への意欲は十分ありましたが、拝受については慎重でした。

一つ、海軍収賄の処理。二つ、明年の大正天皇の即位の大礼。三つ、護憲運動と政党の動向を考えて一旦は拝辞に傾きましたが、各方面、特に今まで援助を受けてきた元老山縣有朋の励ましもあって、遂に大命を拝受しました。

組閣は順調に進みましたが、最後に海軍大臣になって難航しました。加藤友三郎は、かの日本海々戦で東郷平八郎の下で参謀長として活躍し、海軍の逸物と目されていたからです。

加藤は一夜の猶予を求めたあと、前内閣の方針である海軍軍備の充実と、それに伴う予算の増額を入閣の条件にあげました。会談三回に及ぶ中、陸軍からも三箇師団増設の要求が加わり、蔵相予定の新井賢太郎は強く難色を呈しました。

一方衆議院側も元老内閣と強く非難しましたので、清浦は未だ時到らずと組閣を断念し、四月七日に大命を拝辞しました。

松方内閣の司法大臣時代
（中央が清浦奎吾）

（二）第二回目の大命降下

第一回の大命降下から十年、その間清浦は枢密顧問官として精励するとともに、大正四年（一九一五）九月には全国蚕糸同業組合中央会長に推され、大正六年（一九一七）三月枢密院副議長、そして大正十一年（一九二二）二月には、遂に枢要最高の枢密院議長となりました。

熊本県初の総理大臣

清浦奎吾

KIYOURA KEIGO 1850～1942

一方内閣は、大隈重信・寺内正毅を経て、第十九代には平民宰相原敬内閣の誕生、第二十代高橋是清内閣と続きましたが、二十一代加藤友三郎のあと、奇しくもまた山本権兵衛内閣でした。

大正十二年（一九二三）八月二十四日加藤が現職のまま逝去のあと、八月三十一日大命を拝した山本は、早速組閣に取りかかる中、翌九月一日思いもかけぬ関東大震災が起こり、一瞬にして東京は崩壊して焼け野原となり、十万余の尊い生命が奪われました。

しかし、山本は精力的に組閣を進め、後藤新平・犬養毅・井上準之介・平沼騏一郎など第一級の人材を得て九月二日に組閣を終え、第二次山本内閣は発足しました。

山本内閣は、当面の緊急課題である帝都の復興に鋭意取り組む中、未曾有の不敬事件が発生しました。

十二月二十七日、国会開会式臨幸のため、摂政宮が虎ノ門にさしかかりますと、突然無政府主義者難波大助が杖銃で狙撃するという一大不敬事件の発生で、山本首相は責任をとって即日辞職しました。

このような政情不安定の時、組閣の大命は、翌十三年一月一日再び清浦奎吾に降下しました。時に清浦は七十五歳の高齢、加えて枢密院議長の要職にあり、思いもかけぬ大命でした。高齢に加えて関東大震災の処理、それに護憲運動の高まりから衆議院の協力の望み難いことを思い、清浦は拝辞を決意しました。

しかし、政情大変の時、「清浦是非とも」の周囲の声、かねて助成を受けた西園寺公のすすめに励まされて、遂に拝受を決意しました。

貴族院出身の清浦は、陸軍・海軍・外務の三大臣を除き、残りのすべてを貴族院から起用し、一月七日、新内閣は発足しました。

施政方針としては、第一に帝都の復興を取りあげました。そして経済の回復、国民精神の振作、教育の振興、綱紀の粛正をあげて取り組むことになりました。

西園寺公と（大正13年）

当時の衆議院の勢力は、政友会二七八、憲政会一〇三、革新クラブ四三と分かれていましたが、第一党で過半数を占める政友会が、総裁高橋是清への不満から、中橋・山本ら百四十九名が分党して政友本党を名乗ったので清浦はこの政友本党を友党として協力を求めました。衆議院の審議が停滞する中で、清浦は最も心にかけていた摂政宮の御成婚式を一月二十六日に滞りなく執行しました。

衆議院では緊急質問が続出し、審議引き延ばしが続いて審議の見通しが立たないとあって、清浦は思いきって一月三十一日に解散し、五月十日を総選挙日と定めました。

やがて総選挙日の五月十日となりました。清浦が頼みとしていた政友本党は三十五席を減して、一一四議席にとどまりました。一方野党の憲政会は五十一議席増やし一五四議席となり、他の野党といっしょになって衆議院での審議が一層困難視されるので、清浦は潔く総辞職を決意し、六月七日解散しました。満五ヶ月の在任でした。

清浦は、

「この内閣の使命の一つは摂政宮殿下の御成婚式を平穏無事にとり行うこと。二つには、選挙を公正に行って真に国民の意思を見ることであり、この二つの大任を無事に果たした以上長く政権

に留まって恋々たる必要はありません。」
と淡々たる表情で、その時の心境を次の詩に託しています。

『幸に大過なく亦功無し
半歳の辛酸一夢の中
好く此の心をして冷熱を忘れしむ
人間何処にか清風ならざらん』

人はわずか五ヶ月の内閣総理大臣と評するかもしれません。しかし、「山高きがゆえに尊からず、木あるをもって尊しとなす」ともいいます。如何なる政治状況のもと、どのような心境・決意で大命を拝受し、その上で何をなし得たかをもって評価したいものです。

清浦内閣閣僚

清浦奎吾の教え

清浦奎吾は、常に「四恩」を忘れることはありませんでした。その教えとは、

一つ「親の恩」
二つ「先輩の恩」
三つ「朋友・同僚の恩」
四つ「時世の恩」

これらは、すべて奎吾自身を育ててくれた人々への感謝を表したものです。私

たちは、今自分達を育ててくれている人たちへの感謝の心を忘れ去ってはいけないと思います。

また、清浦奎吾は「要するに、人は如何に独立独歩を唱えても、四つの恩だけは被らねばならない。」と結んでいます。

清浦記念館

明照寺内にある清浦伯の墓

清浦記念館前の銅像

熊本県初の総理大臣

清浦 奎吾

KIYOURA KEIGO 1850～1942

年表 History

一八五〇年（嘉永三年）▼大久保了恩の五男として旧鹿本町来民の明照寺にて出生

一八六〇年（万延元年）▼武藤昌英について漢学を学ぶ

一八六二年（文久二年）▼大津町大矢野塾に入り漢学を学ぶ

一八六五年（慶応元年）▼豊後日田の咸宜園に入学

一八六九年（明治二年）▼咸宜園都講となる

一八七〇年（明治三年）▼業を終え日田を辞し来民に帰る

一八七一年（明治四年）▼熊本坪井に私塾を開く

一八七二年（明治五年）▼埼玉県大教授心得となり風渡野学校長に就任

一八七三年（明治六年）▼埼玉県学校改正所主任となる

一八七六年（明治九年）▼司法省に入り大審院検事局詰となる

一八七七年（明治一〇年）▼検事となる

一八八六年（明治一九年）▼内務省警保局長となる

一八九一年（明治二四年）▼貴族院議員となる。欧州視察

一八九二年（明治二五年）▼伊藤内閣の司法次官となる

一八九六年（明治二九年）▼松方内閣の司法大臣となる

一八九八年（明治三一年）▼山縣内閣の司法大臣となる

一九〇一年（明治三四年）▼桂内閣の司法大臣となる

一九〇二年（明治三五年）▼男爵を授けられる。大日本蚕糸会会長となる

一九〇三年（明治三六年）▼農商務大臣となる

一九〇四年（明治三七年）▼発明協会会長となる

一九〇五年（明治三八年）▼内務大臣兼任となる

一九〇六年（明治三九年）▼枢密顧問官となる

一九〇七年（明治四十年）▼子爵を授けらる

一九一五年（大正四年）▼組閣の大命を拝すが、拝辞

一九一六年（大正五年）▼蚕糸業同業組合中央会長

一九二二年（大正一一年）▼枢密院議長となる

一九二四年（大正一三年）▼一月、内閣総理大臣となる六月、総辞職

一九二六年（昭和元年）▼日本新聞協会会長となる

一九二八年（昭和三年）▼伯爵を授けられる

一九四二年（昭和一七年）▼静岡県熱海市米寿庵にて歿

あとがき

山鹿市教育長　田中　宏

山鹿市では「人づくり」を大きな理念・目標として行政に取り組んでいます。

そのような中、教育委員会では「近代の山鹿を築いた人たち」と題して、ふるさと山鹿の今日を築いた偉人を、子どもからお年寄りまで広く市民の方々に紹介し、顕彰できる冊子を発行しようと考えました。特に未来を担う子どもたちに、ふるさと山鹿にはこんなに立派な先輩がいたと言うことを知ってもらい、郷土を誇りに思い、将来に夢と希望を持ってもらいたい。このような願いを込めて発行したものです。なお、編集に当たっては、各学校の先生方に献身的にご協力をいただき心から感謝致します。

参考文献
『清浦奎吾小伝』清浦奎吾顕彰会編
『清浦伯を偲ぶ』佐藤正徳著
『わたしたちのふるさと鹿本町』鹿本町教育委員会編

近代の山鹿を築いた人たち　001
熊本県初の総理大臣　清浦 奎吾

平成 20 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会　教育部　文化課
〒861-0541　熊本県山鹿市鍋田 2085（博物館内）
TEL　0968 - 43 - 1691

編集委員
委員長／中山　哲朗（鹿本中）　班　長／松尾　俊紀（来民小）
委　員／山下　和久（稲田小）　大林　　健（中富小）
永山　　健（大道小）